

過去旅行会社

済美高校 1年 金森 美紗

「こんにちは、初めまして。私、過去旅行会社社員の秀と申します。」

そう言い突然仕事の帰り道、暗い道路を歩く私の前に現れた白い光と謎の男の人。何処か懐かしい彼の笑顔。真っ白い名刺を差し出される。見た限り何も書かれていない紙切れだが、受け取った瞬間ゆつくりと名が浮かび上がった。常識外れな現象に驚き、一歩退く。

「山根舞香さん。貴方にやり直したい過去はありますか。」

男にそう聞かれ、咄嗟に首を縦に振ってしまった。

「今回は我が旅行会社を選んで頂き誠にありがとうございます。約束事等守って頂く事を条件に旅行して頂きます。旅は砂時計を使います。この砂時計を壊してしまうと使用者が砂にならなければなりません。」

説明書を渡され一通り目を通し改めて深く領いた。正直今の状況についていけない自分もいるが、過去をやり直したい気持ちの方が大きかった。

「旅行のキーの砂時間をお渡しします。過去旅行時間は一時間です。短くも長くもできません。では、行きたい時を念じ逆さに。」

半信半疑で砂時計を握り、目を瞑り17の時の母、自分を思い浮かべた。

ゆつくり目を開けると懐かしい光景が目飛び込んできた。ベッドに横たわる母。そして思ってもない言葉を口にする私。

「お母さんなんて最低。もう顔も見たくない」

酷い言葉を最後に私は病室を飛び出した。どうやら私が過去の自分になっている様だ。母は元々体が弱く殆どが入院生活。そんな中些細な事で喧嘩をしてしまったのだ。記憶ではこの数十分後に母が亡くなった。どうにも解決策が見つからないので、病院のロビーで考える事にした。

点滴中の人等様々な人が居る。私も端っこに座り考える。解決策なんてとっくにしているはずなのに、ただ単にお母さんと仲直りすればいいだけの話。「ごめんね」ただその一言で済む

であろう事なのだ。そんな事もできなかった過去の自分は愚かで、恥だ。日頃、母に感謝を伝えることも無く生きていた事も腹立たしい。

「何を迷っているのかはわかりませんが、貴方は過去をやり直せる立場にいるのです。それだけは頭の片隅に置いておいて下さい。」

そうだ。私は過去をやり直す為にここに来たんだ。そんな事を忘れてどうする。同じ事の繰り返しにならない為、私は急いで病室へ向かった。勢いよく扉を開けると、医師に囲まれた母の姿が。

「大変危険な状態です。意識があるのも今のうちかと。」

近くの看護師にそう伝えられ、小走り母の横につく。息も絶え絶えな母の姿に涙が溢れる。先程まで喧嘩をしていたとは思えないくらいの苦しみ方に驚きながらも話し始めた。

「お母さん。さっきはごめんなさい。そしていつもありがとうございます。」

泣きながら伝えるも、母は何も答えてくれない。でも、伝わっている様で口角が上がったのが確認できた。

「体調が悪い時も私の事を心配してくれたり、電話してきてくれたり、嬉しかった。大好きだよお母さん。」

必死に伝えると、母の口が「ありがとう」と動いた。それを最後に母は目を閉じた。反応の無い母を揺さぶりながら呼びかける。そんな私を止め、医師が脈を確認し、首を横に振る。

ああ、亡くなったんだ。そう思い、母を見ると安らかな笑顔で、私の昔見た母の顔とは正反対な母がいた。

それを見て安心した私は、ペタンと床に座り込んだ。

「パリッ」

そのいやな音にハッと我に返る。そっとソレが入っているポケットの中を見ると、砂時計が割れていた。「砂時計を壊すと使用者が砂になる」その言葉を思い出し、すぐさま病室を飛び出した。廊下に居た秀さんに震える手で破片を渡す。

「割れてしまったんですね…。決まりは決まりです。思い残す事はもう無いですか。」

彼に悲しい顔でそう尋ねられ、笑顔で頷いた。すると、一瞬秀さんの後ろで彼に似た男の人

が病室に入つていったのが見えたがその途端に、視界が歪み、気付くと秀さんの手の中で握られていた。

こうして私は今日も秀さんと一緒に旅行のキーとして過去を旅している。